

個別最適化された教育の実現と そのための教職員の養成

副学長(企画・評価計画担当)、教育学部長

秦 敬治

LOVE&SCIENCE.

すべてはキミの未来のために。



SCIENCE is here, the future is here.
岡山理科大学
OKAYAMA UNIVERSITY OF SCIENCE

略歴

- ◆学校法人西南学院 本部・大学職員(主に財務)
- ◆愛媛大学 助教授・准教授・教授→客員教授
- ◆名古屋大学 客員教授
- ◆追手門学院大学 副学長・学長補佐・教授
教育開発センター長→客員教授
- ◆大阪経済大学 特別招聘教授、SCTL副センター長
- ◆アジア太平洋学生支援協会(APSSA)会長、常任理事
- ◆一般社団法人大学改新機構 代表理事、NPO法人西南フットボールクラブ代表理事
- ◆専門=教育経営学(高等教育経営)、リーダーシップ論、人材開発、大学職員論、FD、SD、IRなど
- ◆これまで国内の大学で多くのFD・SD講師及びコンサルティングを担当。経営者塾・公務員管理職研修・企業コンサルティングも多数担当。
- ◆博士:教育学(九州大学)

LOVE&SCIENCE.
すべてはキミの未来のために。

岡山理科大学

本日の話題提供

1. 世界、社会、日本が迎える未来とは？
2. これからの未来に対応できる人材とは？
3. そのための大学教育は今のままで良いのか？
4. これからの大学の教職員のあるべき姿と、その育成とは？

1. 世界、社会、日本が迎える未来とは？

- ①世界は、ここ20年～30年では国家レベルでの友好的な共存や地球レベルでの運命共同体として存立できない
- ②予測不能な状況と超スピード化社会が加速
自然レベルも人間社会レベルも
- ③「日本」という国は、22世紀には存在していないかもしれない
国家として成り立たない状況とともに、このままでは日本の若者が世界の中では「負け組」になってしまう⇒既にその傾向
極端と思われるかもしれないが最高と最低を考えることは重要！

LOVE&SCIENCE.
すべてはキミの未来のために。

岡山理科大学

LOVE&SCIENCE.
すべてはキミの未来のために。

岡山理科大学

1. 世界、社会、日本が迎える未来とは？

特に、日本に焦点を当てて考えた場合、このような状況を作り出した政治と教育の責任は非常に大きい。

大学現場でのその要因は、

- ①世界の状況とそこにおける日本の状況を学生に明確に伝えることができなかった
- ②最新の教育手法や環境を取り入れてこなかった。
例.英語教育、IT環境、同年代だけの教育等
- ③「教育とは教えること」から脱却できていない

2. これからの未来に対応できる人材とは？

知識やスキル以前に

- ・ストレス耐性
- ・ストイック性
- ・Be Alert (研ぎ澄まされた感性)

これら3つを備えておく必要がある。そうでなければ、

- ①レジリエンス(ストレスなどの外的圧力を撥ね返す復活力)
- ②ウェルビーイング(身体的・心理的・社会的に満足のいく状態)を作り出せない。

2. これからの未来に対応できる人材とは？

しかし、日本ではこれらの能力を培う教育がカリキュラムとしてこれまでは存在していなかった

⇒岡山理科大学では2020年度から導入

「こころ豊かに生きる」を教育の3本柱の一つに掲げ、「セルフアウェアネス」「ライフビルディング」「アサーティブ・コミュニケーション」の3つの科目を設定し、年間1,000名以上が受講。

2. これからの未来に対応できる人材とは？

また、一人前の社会人の定義として、私は
「感じる」⇒「考える」⇒「判断・決断する」
⇒「行動する」⇒「責任を負う」

という一連の流れを行うことができる人であると考えている。

しかし、日本の教育は、「感じる」授業を設定しておらず、時には「考える」「判断・決断する」「行動する」「責任を負う」ことを大学(学校)や教職員が奪っている、もしくは与えていないケースが多々見られる。⇒教育の機会の搾取

2. これからの未来に対応できる人材とは？

まずは、未来に対応できる人材の基礎・基本として

「感じる」⇒「考える」⇒「判断・決断する」

⇒「行動する」⇒「責任を負う」

という一連の流れを行うことができる人を育成することは不可欠である。

2. これからの未来に対応できる人材とは？

次に、未来に対応できる人材には、「培った知識とスキルを基に、新たなものを創出できる」必要がある。



新たなものを創出するためのノウハウや経験を多く積むことができる教育が重要となる

3. そのための大学教育は今のままで良いのか？

①「感じる」「考える」「判断・決断する」「行動する」「責任を負う」

②「培った知識とスキルを基に、新たなものを創出できる」

人材をこれから輩出するとなると、大学教育をどのように変革させる必要があるのだろうか？



これらは、前出の「こころ豊かに生きる」授業やプロジェクト型の授業をバランスよく導入することが有効であろう。ただし、ありきたりのプロジェクト型授業ではなく、多様な経験ができるような設定が必要である。

3. そのための大学教育は今のままで良いのか？

ここでポイントとなるのは、個人での取り組みとチームでの取り組みや、対面やオンラインでの取り組みなどのバランスである。



さらに、教職員が手や口を出さずに、黙って見守ることが重要となる。教職員は時々、情報やヒントを与え、学生達が「自ら完結できた」と感じさせる仕掛けが重要となる。



これら教育は、想像以上に手間や労力がかかる。それを心地よく行える教職員が不可欠！！

3. そのための大学教育は今のままで良いのか？

次に重要なのは、知識型教育からの脱却である。残念ながら、知識型教育や積み上げ型教育は、youtubeや大手オンライン塾の方が大学の授業よりも質が高いケースが多い。今後、これらの授業は、対面での実施が激減すると思われる。この分野の教員も今後は、これら知識や積み上げたものを活用して新たなものを創出する授業を展開することを期待されることとなるであろう。



すなわち、「**教員よりもレベルの高い人材育成ができる**」ことに繋がる教育が要求されるのである

4. これからの大学の教職員のあるべき姿と、その育成とは？

これからの大学教職員のあるべき姿は、

- ①自分達以上の人材輩出に寄与する
- ②「感じる」「考える」「判断・決断する」「行動する」「責任を負う」場を提供し、その機会を奪わないことが重要⇒これができる教職員は意外と少ない
- ③自分自身が学び続け、教職員チームで最高のパフォーマンスを作り出し、学生と一緒に新たな教育手法を創出する人材が求められる⇒**学生の手本となる**

4. これからの大学の教職員の育成とは？

これからの大学教職員の育成は、

- ①柔軟な労働環境(教員・職員を問わず、チームで働ける環境)
- ②採用は重要。大学の理念や目的と適合しない人を雇わない
- ③組織の型にハマ込むのではなく、自分自身が学び続けたいと思うことを支援する
- ④教職協働でプロジェクトを行う機会を与える(可能なら学生や学外の方も加えて)
- ⑤本人の強みを活かした人事配置(かなり重要！！)